

75 75期リレーエッセイ

不惑の脱サラ新人

会員 中山 貴公



1 はじめに

弁護士になって2週間位した頃（本年1月下旬）に所属事務所の所長に連れられ会派の新歓で鯨飲馬食を楽しんでいましたら、縁もたけなわの頃合いに所長と共に雛壇に上げられ自己紹介を求められ、所長の合いの手に乗せられる感じでホイホイ適当にうそぶいて降壇しましたら、居合わせた本誌編集長に呼び止められ、右も左も訳も分からぬまま本稿の執筆をお受けすることになってしまいました（笑）。

2 自己紹介

お受けしたものの、後になって、本誌は錚々たる方々が投稿されている由緒正しい機関誌と知り全くたじろぐばかりの次第ですが、皆様はじめまして。75期の新人弁護士の中山貴公（なかやまきこう）と申します。そのような本誌への投稿に耐えられるような人物では毛頭ございませんが、一応自己紹介をしますと、新人弁護士ではございますものの秋田での修習中に不惑を迎えた中年の脱サラです。司法修習に入る直前の一昨年（2021年）11月まで、約12年間、どこにでもいそうな、ごく普通のサラリーマンをしておりました。勤めていたのは、塗料メーカー（7年弱）、通信会社グループ（5年強）でして、その間はずっと管理系職種で、経験順に内部統制（約3年半）、海外事業企画（約3年半）、国際税務（5年強）をしておりました。

3 脱サラして弁護士になろうと思ったきっかけ

私にとって前職の仕事は、（ときに当人の能力・資質を凌駕し圧倒され苦慮に達したことも多々ではあり

ましたが、）遣り甲斐に溢れ、仲間にも大変恵まれたものであったと今でも思います。修習に行くために退職する前の何年間かは、折しも、担当していた国際税務の世界は、OECD・G20が「100年に1度」とも呼ぶ大変革期に当たっていて、その意味で、担当業務は、てんやわんやの大盛況でした。もし弁護士になっていなかったら今頃は、そちらの業務でひっちゃかめっちゃかに忙殺・翻弄されていたろうと思います。

それでは、なぜ脱サラして弁護士になったのか？、とよく聞かれたりします。よく聞かれはするのですが、その度に上手く答えられずに困ることが多いです（笑）。浅学非才も良いところとの自覚十分の私が働きながらカンタンではない司法試験に挑んでいた当時の心境は、今、本人が振り返っても、全くもって度し難いと言いかいようがありません（笑）。ただ、自分でも上手く形容し難い心象風景みたいなものにピタッとシンクロして、私などでは到底表現できないほどにビビッドで的確に描写した映画を最近鑑賞しました。それは『妖怪の孫』（監督：内山雄人、企画プロデューサー：古賀茂明）という映画です。

4 弁護士になっての日々の所感

編集長にお声掛け頂いたあの日から執筆当時の今（2023年6月14日）でもう4か月半が経つとは早いです。サラリーマン時代とは何から何までガラリと変わり、それを書き出したら指定字数の10倍位は優に書けそうです。ただ、残念ながら、要領を得ない散文の筆致でもう指定字数が尽きました（笑）。ここで失礼するのをご容赦下さい。

ただ、今現時点の日々の所感についても最後に一言。この仕事に就けて心から良かった！